



[三芳・白浜地域]

実施者

◀教 員▶千葉大学 特任専門員 / 地域コーディネーター 阿部 厚司

◀参加者▶千葉大学 理学部生物学科 3 年 安済 峻雅

◀協働パートナー▶

【行 政】南房総市役所 市民課市民協働グループ

【企業等】ヤマナハウス、合同会社 WOULD（シラハマ校舎）

【個 人】地域おこし協力隊 荒川 悠ほかメンバー、ヤマナハウス南房総三芳シェア里山 代表 永森 昌志、
副代表 沖 浩志、溝口 耕一、合同会社 WOULD（シラハマ校舎） 代表 多田 朋和

1. 背景と目的、実施内容

2020 年度に実施した「地方圏における教育コンテンツの実証事業」では、オンラインツールを用いることでチューター側が実際に現地に足を運ばなくても学習サポートをすることができた。これはコロナ感染拡大や、都市圏と地方圏の距離的な隔たりによって生じる教育面での問題を解決する可能性がうかがえるものであった。一方で、場所にとらわれず会議や授業をすることができるというオンラインのメリットが徐々に明らかになり、コロナによる一時的な措置ではなく、むしろこのような形態が主流になりつつある。こうした背景をもとに地方創生への様々な提案が可能である。

場所にとらわれないという点に関しては、リゾート地等で休暇をとりながらリモートワークを行う「ワーケーション」という働き方が確立している。ワーケーションは「Work（仕事）」と「Vacation（休暇）」を組み合わせた造語であるが、「Study（勉強）」と「Vacation（休暇）」を組み合わせた「スタディケーション」が近年注目を浴びつつある。これは学生が地方に滞在して休暇を楽しみながら、自身の学業に取り組むというものである。大学でオンライン授業が増えたことで学生によるスタディケーションはより一層ハードルが下がったものと思われる。滞在中にできることは様々であるが、地域には地域の魅力があり、学生には学生ならではの目線やアイデアがあることから、工夫次第では様々な形での地域への貢献が期待できると考えた。本事業では、学生が地域を知り、地域で学び、自らの専攻や興味と絡めた調査研究を実施する新たな形のスタディケーションの可能性を模索した。

今年度は、かねてより本学の活動にご理解いただいているヤマナハウス（旧三芳村）とシラハマ校舎（白浜町）にご協力いただき、活動拠点をさせていただいた。以下、活動日程及び内容である。

(1) 月例イベントへの参加

日程：10/2、10/16、11/6、11/20、12/4、12/18、1/8 計7回

ヤマナハウスでは、コミュニティメンバーで行われる本来の月例活動への参加に加え、ヤマナハウス副代表の沖浩志氏のサポートのもと、裏山や周辺河川の生物調査を実施した。ヤマナハウス周辺のような里山において、生物調査は生態系の保全を図るうえで重要である。裏山調査では昆虫類、鳥類、植物をはじめとした動植物、河川調査では淡水魚類や水生昆虫などを調査し、結果は今後の汎用性を考慮してデータベースにまとめた。また、生態系の考察とともに、生物の食料としての利用可能性を調査した。バッタをはじめとした昆虫類、サワガニやテナガエビなどは捕獲したのち適切な方法で調理・実食し、味や食用の有無を確かめた。味に関しては客観的な感想を得るために、生物調査チーム以外のコミュニティメンバーにも試食してもらった。なお、ここでは保全と食料資源の考え方は相反するものではなく、生物調査を通した適切な資源管理のもとで、里山を楽しむための方法の一つとして昆虫などを食料資源と考えている。現在、生物調査や昆虫食をテーマとした講座の実施を検討している。

(2) ヤマナアカデミーへの参加

日程：6/5-6（里海編）、10/24（狩猟編）、12/11-12（アウトドア編）計3回

ヤマナアカデミーへはスタッフとして参加し、運営のサポートをするとともに、自然体験型イベントの企画・運営の方法について学んだ。また、参加者の立場でイノシシを解体したり、アウトドア技術を学んだりしたことは、いずれも貴重な経験であった。

(3) シラハマ校舎での活動

日程：12/5-7 12/20-21 計2回

シラハマ校舎では、昨年度に引き続き今年度も活動の場を提供していただき、現地に滞在しつつスタディーケーションの可能性を模索した。その中で、合同会社 WOULD 代表の多田朋和氏より



1 生物調査の様子 2 バッタ類の実食 3 「ヤマナアカデミー里海編」 4 シラハマ校舎

域学協働の工夫！

- ★かねてより本学の活動にご理解のある方々に活動の場を提供していただき、域学協働の関係性が長期にわたって継続していることの重要性がうかがえた。
- ★ヤマナハウスまでの交通手段に関しては、一部ヤマナメンバーの方々に送迎していただいたことで、スムーズに活動に移行することができた。
- ★月例イベント参加者は出身、職業、年齢層が多様で、そうした方々との交流を通して様々な知識を学んだり、地域の魅力について気づいたりすることができた。

り同施設区域にて建設予定の「災害時における避難拠点としての役割を持つ新型ワーケーション施設」において、利用者が滞在期間中に体験できるプログラム案の作成依頼を受け、裏山を利用したアクティビティやシラハマ校舎を起点としたサイクルロゲイニングを提案した。サイクルロゲイニングにはシラハマ校舎のレンタサイクルを使用することを想定し、実際に地域を走ってコースの検討をした。その他にもコワーキングスペースで大学の課題などに時間を費やし、スタディケーションを実践した。

2. 成果と課題**(1) 地域貢献面**

シラハマ校舎に滞在中、昨年度実施した事業より繋がりがあった生徒と対面での再会を果たすことができ、近況報告や大学についての話などで有意義な時間を過ごすことができた。サステナブルな関係を築いて教育面のサポートを続けられていることは、昨年度の事業の十分な効果を示唆しているとともに、スタディーケーションをはじめとした現地滞在の機会の重要性がうかがえる。一方で、感染拡大の影響で現地での活動が制限されたこともあり、今年度の活動は地域貢献の面で具体的な成果に繋げるまでには至らず、調査・提案のみにとどまってしまったのは残念である。

(2) 教育・研究面

シラハマ校舎での活動はスタディケーションの新しい形であり、短期間ではあったがこうした事例を作れたのは意味のあることだと考えられる。月例イベントは日帰りで参加したが、定期的な参加によってヤマナメンバーとの交流を深めることができ、地方で活動する際のハードルが下がったように感じた。長期的には

滞在しないが、平日は大学で勉強をし、休日は地方で活動をする2拠点生活のようなスタイルも、南房総市におけるスタディケーションの一形態として考えられる。

また、活動に生物学的な知見や興味を生かしたことは成果の一つと考えられる。具体的な実績として挙げられることは少ないが、様々な活動を通して得られた貴重な経験は来年度以降の活動に大きく貢献すると期待できる。

3. 今後の展開

月例イベントでの生物調査は引き続き行い、データベースの完成度を高めていきたいと考えている。今は一部の人でしか生物調査を行っていないが、ヤマナハウス周辺の生態系を長期的に見守っていくために、地域の人々を巻き込んだサステナブルな活動としていきたい。生物調査や昆虫食、サバイバルなどをテーマとしたイベントの実施を検討していくほか、環境省の『モニタリングサイト1000』の一般サイト（里地）への登録も目指したいと考えている。シラハマ校舎では引き続きサイクルロゲイニングと裏山のエリアを使ったアクティビティの検討をしていきたい。また、私たちはゼミや卒業研究などで活動しているわけではなく、立場を明確にして動きやすくするために「（仮称）学生版地域おこし協力隊」として継続的な活動とすることも考えている。多くの学生がそれぞれ自分の強みを持っているため、本業である大学の授業と、自らの専攻や興味を生かした地方での活動を組み合わせたスタディケーションの仕組みが確立すれば、様々な学生の力を南房総市における地方創生の原動力とすることが可能であると考えられる。

*表彰・マスコミ掲載など

・「シラハマ校舎COC＋事業」掲載 <https://www.awashirahama.com/nagao/coc/index.html>

・「南房総三芳のシェア里山」掲載 <https://yamanahouse.site/>